

「カルメン」から分かる人類の将来

2016年入学 経営システム工学科 四ッ谷悠介

「カルメン」は狂気に瀕したストーカーが逆上して女を刺してしまう、ということで初演の際にはさほど人気が出なかったオペラにもかかわらず、現在ではとても人気のあるオペラの一つになっている。このオペラが聴衆に受け入れられ現代までずっと受け入れられているのは何が理由なのか、行動心理学の点から分析してみる。また、そこから見えてくる現代の行くべき方向について考える。

まず初めに、人から人への行為全般を指す「ストローク」という用語があり、これにはプラスとマイナスの二種類がある。

- ・+のストローク→「褒める」など相手を+の気持ちにさせる全ての行為。
- ・-のストローク→「バカにする」など相手の気分を悪くさせる全ての行為。

人間は<無視される事>や<孤独>に弱く、「ストロークを得たい」と常に思う。プラスのストロークが得られなくなった時、「たとえマイナスのストロークでも何もないよりマシだ」と考える。だからストロークは「心の栄養」とも言われている。

例えば、好きな人に対して、イジワルをする人がいる。相手に好かれないはずなのにおかしいことであるが心理学的にあれば、「好いてもらう」というプラスのストロークが欲しいけれど、それが叶わないから「嫌がられる」というマイナスのストロークでもいいから欲しがらる。つまり「好きな人にどんな形でもいいから構って欲しい」という事である。

最近でもいったん別れたもののトラブルになり男性が元交際相手の女性に必要以上に迫ったり、最悪の場合殺してしまう事例がある。このような人は上記のマイナスのストロークを自分の「心の栄養」にしており、最初はストーカーに留まっていたものが段々とエスカレートしていき最悪のケースにまで発展してしまう。ドン・ホセもこのタイプであり、初めのうちはカルメンからプラスのストロークを欲していたものの、カルメンに振られてからマイナスのストロークがエスカレートしていつてしまう。カルメンもまたそうであると考えられる。カルメンの恋は約二ヵ月しか持たないことからわかるように、カルメンの性格は、熱しやすく冷めやすいタイプなのだと考えられる。このことからカルメンは、はじめ自分の好いた相手からはプラスのストロークを欲し、暫くすれば別の人に乗り換え、元彼からマイナスのストロークを得る、というサイクルを繰り返しているのだと思う。

一方でミカエラは、二人とは対照的にプラスのストロークを欲していると推測できる。これは、ミカエラがマイナスのストロークを誰かから得ている場面がないことから考えられる。ミカエラがドン・ホセを探しに街にやってきた時に、周りの兵士がミカエラに声をかける場面があるが、ここでミカエラがカルメンのように強く相手を突っぱねるような感じではなく、怖いと感じながらも申し訳なさそうに、すいません、すいません、と誘いを断るところから、カルメンとは違い、ミカエラはプラスのストロークを欲しているのだと推測できる。[人間は誰しもストロークがないと生きていけないので、マイナスのストロークを欲していない場合、プラスのストロークを誰かからもらい、ストロークを得ていると考えられるからである。]

このようなことから、「カルメン」は人間の「心の栄養」の二つのストロークがしっかりと描かれているオペラであると考えられる。

また、マイナスのストロークを与える人の特徴として以下の二つのタイプがある。

「過保護に育てられ、全能感を持っているタイプと、逆に親から冷たく育てられ、孤独感が強いタイプ」である。これは前者がドン・ホセで、後者がカルメンであり、『カルメン』は両者が上手く描けている作品であることがわかる。

人間誰しもこの「ストローク」を欲するため、初めて「カルメン」を観た人は自分の中にどこかドン・ホセやカルメンに似た感覚を感じたため、ここまで聴衆に受け入れられたのだと思う。

以上のことからこの作品は、これからの世の中への啓示になっていると私は感じる。というのも近年日本国内だけでなく世界各地で貧富の格差が広がっており、アメリカのトランプ大統領就任からも分かるように特にアメリカでは顕著になっている。これは、アメリカのトランプ大統領就任には、中間層よりも下の白人労働者が職を失い、また、一流大学の学費の高騰、金持ちしか金持ちになれない、と言う国民の不満が一部反映されていることからこのように言える。

従ってマイナスのストロークを欲する人が上述した二者であるのであれば今後マイナスのストロークを欲する人が増えていく可能性がある。また貧富の差だけではなく、近年のSNSの発達により自分のことを構ってくれる場が広く設けられるようになったが、一方で自分の投稿に対して反応がすぐ来ない時に「無視されている」という感情や、他人の投稿を見ての「孤独感」を感じている人が多くなっているのもまた事実である。

つまり私たちは、人間には「ストローク」という要素が必要不可欠である。そしてその中にプラスのストロークとマイナスのストロークがあり、どちらからも「ストローク」を得ることが可能だが、プラスのストロークを発信していくことが人間関係を円滑に進めるのに必要である、ということを知る必要がある。もし、このことを知っていれば、自分がマイナスのストロークが欲しいと思った時に、そこをグッと堪えることができる確率が高くなると思う。

例えば、A氏、B氏、ともに「褒めようがない」気の毒なタイプである。ところがA氏はすっかり分をわきまえて、静かに控えめにしているのに対して、B氏は周囲にいやがらせをしたりして、マイナスのストロークを出し続けている（というか無理矢理引きだしている）、本人としては、厭がらせが生き甲斐になっているケースもある。このような場合、どのようにこの人を矯正していくのだろうか？

自分の考えとしては、周りのマイナスのストロークを変えようとしていくのではなく、まず、自らがプラスのストロークを欲し、また、発信していくことが全てだと思っている。

マイナスのストロークを出す人は、皆だいたい、マイナスのストロークをもらってしまったことからそのような性格へと変わってしまうのだと思われる。

一説ではマイナスのストロークを与えた場合、マイナスのストロークでかえって来る確率が約90%に対して、プラスのストロークを与えた場合にプラスのストロークがかえって来る確率が、約50%と言われています。50%は、決して高い数字ではないが、二回のうちに一回はプラスのストロークがかえって来ると思うとかなりの高確率な気がする。

よってマイナスのストロークを欲し、また発信する人に対して、プラスのストロークを与え続けることで、いずれプラスのストロークがかえって来るのではないかと考えている。

マイナスのストロークをグッと堪えることのできる人から周りにプラスのストロークを発信、ないし欲してもらい、周囲に影響を与えて欲しいと私は思っている。

そのような人が多くなれば自然と周りの環境もより良いものになり、世界全体としてもよくなるのだと思う。